

金持ちの男

マルコによる福音 10:17-27

(そのとき、) イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄って、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさん

の財産を持っていたからである。

イエスは弟子たちを見回して言われた。「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。」弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた。イエスは更に言葉を続けられた。「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」弟子たちはますます驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と互いに言った。イエスは彼らを見つめて言われた。「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」

説教

きょうの福音のイエスはそうとう手厳しいことをいっています。でも、イエスは金持ちの男のことを嫌っているのか、というとそうじゃないことがわかります。

イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。10:21a

慈しんでいるのならやさしく言ってあげればいいのに、いやいや、好きだからこそ手厳しいことをいって指導されたのか？という想いも浮かんできます。しかし、福音によると指導したということでもない、イエスの元に走りより、ひざまずいて教えてもらおうとした金持ち男は結局は「気を落とし、悲しんで立ち去る」ことになりました。

1) なぜわたしを善いというか

**「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」イエスは言われた。
「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。」**

10:17b-18

ここでイエスは逆説ではありますが、はっきりと言われています。

神おひとりのほかに、善い者はだれもない。

自分は神が善いと同じ意味で善い者ではないということ、そこを踏まえて、ご自身が神さまと、人である限りの自分をはっきり区別して、そこを混同してなならん、といういうことをイエスは述べられています。やはりこのことはちゃんと受け止めていかなければならないことです。イエスのご自身で神ではないとはっきりといわれている、このことはいつも自分の中で問い続けることが必要だと思うので、書きとめて、お話することにしました。

2) どんなことをすればいいのか？

金持ちの男の目のつけどころは間違っています。それをイエスは見抜いています。「善い先生」「何をすればいいのですか」これさえやっておけば、いいのですか、それともここまでやれば・・・これを自分がやって「永遠の命を受け継ぐ」その考え方が自体が、いかん、ダメだ、彼のそういう目のつけ方を変えないとダメなのだ。そこを変えるにはどうすればいいのか、それがそのあとに続くイエスの答えです。

『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。10:19-22

ここをただ一回だけ聞くと、なにかやっぱり掟を徹底的にやることが大切で肝心かなめのことなのかなあと思えてきます。でも、金持ちが貧しい人に全財産を投げ打ってしまう、そうすると心が安らいで、本当の命にあずかって、何事にも動じない勇気がわいてくるか、必ずしもそうではないだろうと思います。

日本にも有島武郎（ありしまたけお）という人がクリスチャンで、とてもまじめな人で、その上財産家でした。いろいろな人が金をせびりに来たらしいですけれど、しまいにはとうとう全財産をほんとうに捨ててしまいました。それを貧しい人たちにやってしまった。その有島さんは本当に心安らいだかという、けっしてそうではなかったということです。

やはり本当の人間、永遠の生命にあずかるということは、何か人間が掟（十戒）をさきに立てて、それを実行するとかが、最初にあることではなく、神さまとの結びつきをまずは第一に考える、そこに人がある、人が成り立つ根拠があります。

神こそが、ただおひとりの「善い者だ」ということは、その人間の善悪に先立って、その人（わたしたち一人ひとりのことです）をつかみ、人を愛し、励ましてくれる、神とはそういうお方だということを中心にとめる、モーセ十戒もそういうところからでてきているものです。

たった一つ欠けている、まだ7割しかできていない、そういうことではなくて「売り払ってしまえ」というイエスのことばは、そのことを悟らせようと

して出てきていることばだ、人によって言い方を変えて教えたイエスだから
こそのおことばといえます。

男が立ち去った後、イエスは弟子たちを見回しておっしゃいます。

金持ちが神の国にはいるのは難しい。弟子たちは驚きいったい誰が救われる
のだろう、とつぶやきあいます。イエスは彼らを諭します。

人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。

わたしたちはイエスをとおして神のことばを聞くことができます。そしてそ
の教えを完全なかたちではないかもしれないけれど、感じ取ることができます。

人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。
